安全管理【実践編】

～　あらゆる活動の基本　～
大津版災害時ファーストコンタクトの基盤

当該 『安全管理の徹底』 については、必須！
二次災害防止による被害拡大は、絶対にしなくてはならない活動です。

「大津版災害時ファーストコンタクト」は、長尺バールを使っての救出方法を説明していますが、これは一例に過ぎません。
例えば、長尺バールに代わって油圧ジャッキをつかって重量物を揚げる場合や、消火活動・救護活動する場合の周囲への配意など、安全管理の徹底は非常に重要です。

内容を見ていただく前に

大津市消防団地域防災指導員の方々
大津市防災士の方々
に知っておいていただきたいこととして、
別途『０１絶対に必読！」の資料をご確認いただきますようお願いいたします。

大津版災害時ファーストコンタクトは、訓練でも災害現場でも、絶対に二次災害は起こさない、起こさせないという信念で実施いただきます。
そのため、指導（伝えていただくこと）に係わるすべての者が、また、知識や手技を習得いただくすべての方々が安全な訓練ができるように、この資料を見ていただく前に、別途『01絶対に必読！』の資料をご確認いただきますようお願いいたします。

安全管理の第一歩

次の服装、装備を推奨する。

○　動き易い服装
　　※但し、長袖、長ズボンであること。
○　長靴　※釘の踏み抜き防止構造を推奨。
○　ヘルメット
○　手袋
○　ゴーグル
○　警笛　※指揮を執る者から
　　活動する者（メンバー）への周知手段

推奨する服装等を示したものです。

安全管理【理論編】で記載したとおり、安全管理の基本は、安全管理のABCの実践です。
その安全管理の第一歩は服装・身だしなみと言って過言ではありません。
A：当たり前のことを、B：バカにせず、C：ちゃんとする
消防学校では『服装の乱れは心の乱れ』と教えます。消防士だから服装を整えるのではなく、災害現場で活動する一人として服装を整えてください。
危険と隣り合わせである災害現場で活動するに相応しい服装を、訓練時から着用するように徹底しましょう。
頭部を守るヘルメット、手を守る手袋、釘などの踏み抜きに備え長靴を着用してもらいましょう。

安全指差し呼唱の実践

- 元々は鉄道運転員がミス防止のために実施していた**安全指差し呼唱**
- 指差呼唱することで、**１６％まで減少**
- 安全指差し**呼唱の徹底**しましょう

安全指差し呼唱は、元々は鉄道運転員がミス防止のために実施されていた。
安全確認を何もしない状態で発生する事故件数を100とした場合、指差呼唱することで、その発生は**16%まで減少**すると言われています。
指導にあたっては、安全指差し呼唱の徹底を図ってください。

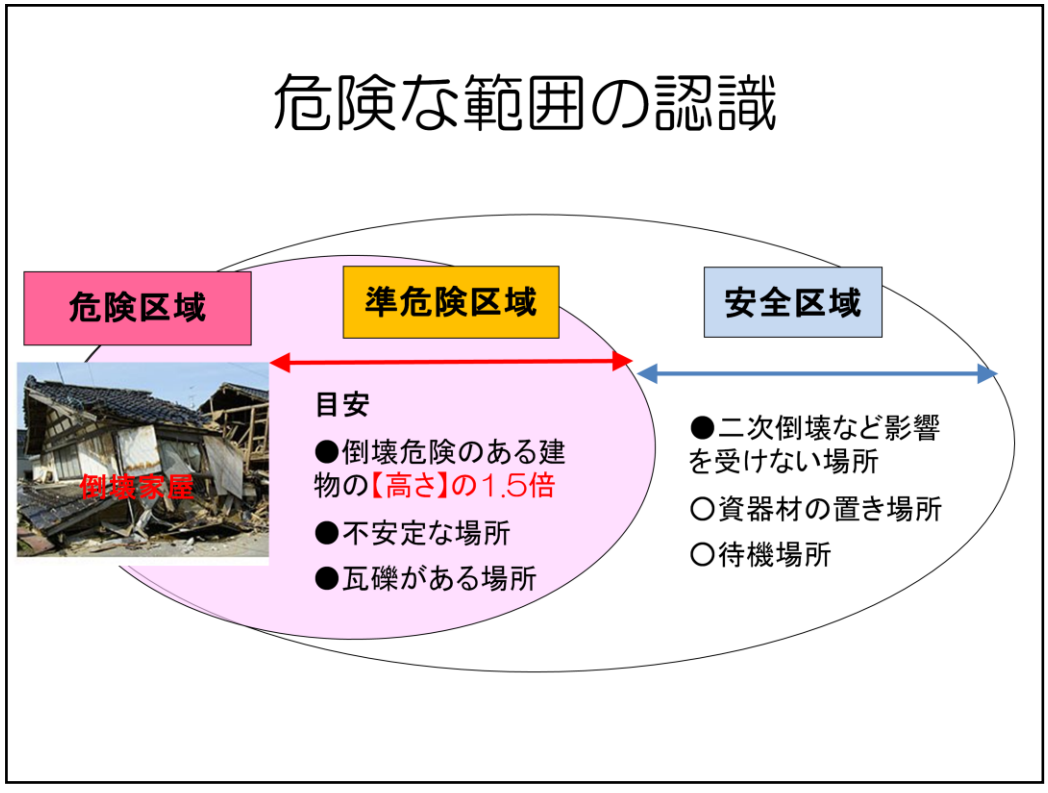
服装の確認

※　実践の訓練でご確認ください。

チームとしての共通認識

- 「**自分の身は自分で守る**」が基本であるが、それだけでは事故や怪我の発生は防止できない。
- **災害現場で活動する「チーム」**としての共通認識が必要。
- **活動する際に、誰がリーダー**になるのかなど、「チーム」として機能するよう指導する。
- 活動リーダーは、**僅かな危険も見逃さないよう配意**し、危険を察知した場合は適切に対処する。

安全管理の基本は、「自分の身は自分で守る」ことです。
しかし、それだけでは事故や怪我の発生は防止できません。
そのためには、災害現場で活動するチームとしての共通認識が必要で、
活動リーダーが誰になるのか、活動者が誰なのかを宣言させると共に、チームとして機能するよう指導してください。
特に、活動リーダーは、要救助者の居るとされる位置だけでなく、僅かな危険も見逃さないよう上方・四方への配意を怠らず、危険を察知した場合は、警笛等でチーム全員に周知することが任務であることを伝えてください。



完全に安全な状態を作り出すことは不可能です。
しかし、災害現場の中にも、危険度の高い箇所と低い場所があり、その認識を行うことが安全管理につながります。

危険区域・・・倒壊家屋が発生している部分、つまり災害が発生している場所は、当然、最も安全管理が必要とされると認識してください。

準危険区域・・・救出活動など、活動に要する場所は、瓦礫などがあり不安定であることから、当然、安全管理が必要です。
目安としては、倒壊している、或いは倒壊危険のある**建物の【高さ】の1．5倍以内**をその区域とします。

安全区域・・・『準危険区域』の外側ですが、絶対的な安全な場所という意味ではありません。
二次的な被害を受けない場所を選定し、資器材の集結やチームの待機場所にします。

こうして、危険範囲の認識をしていただくことで、現場の状況や作業の状況を把握しやすくしましょう。
災害現場には、家族が近付こうとすることもありますが、ただ近付くのを静止するだけでなく、どの位置に待機してもらうかなど、具体的に指示できるようにしましょう。また、震災時だけでなく、土砂災害現場や水害現場など他の災害現場でも同様に危険範囲を認識してください！

活動するチーム構成

チーム

指揮を執るリーダー

・・・活動には加わることなく
全体の危険要因に気を配る

活動する者（メンバー）

・・・自己の安全管理に配意しつつ
指揮を執る者の管理下で活動

チームの中には、指揮を執るリーダーと活動する者（メンバー）とをしっかり区別し、リーダーは実活動には加わることなく全体の危険要因に気を配り、また、活動する者（メンバー）は自己の安全管理に配意しつつ指揮を執る者の管理下で活動する必要があります。活動する者（メンバー）は、リーダーの指示を聞き、同時に、気づいたことや行動を起こす際には積極的にリーダーに声を掛けるようにしましょう。

危険要因の排除

先ずは、認識が必要です!

震災（土砂災）による救助現場は、住宅等建物の倒壊が発生している

↓

そこにはコンロやガス、電気など二次的な火災を発生させる原因となるものが必ずある

更に、余震が予測される場合は、

不安定な柱やブロック塀等が救助活動に危険を及ぼす可能性あり

震災（土砂災）による救助現場は、住宅等建物の倒壊が発生し、人が生埋めになっている可能性が高い現場です。
同時に、そこにはコンロやガス、電気など生活するためにライフラインが引かれた場所で間違いありません。
これらは、災害時には二次的な火災を発生させる原因となるものがあることを忘れてはなりません。

また、余震が予測される場合は、不安定な柱やブロック塀等が救助活動に危険を及ぼす要因であることを認識しなくてはなりません。

危険要因の排除

活動にあたる全ての者が
チームとして共通認識する！

リーダーの合図で、活動する者（メンバー）は救助活動中に二次災害が発生しない環境をつくる。

この二次災害防止措置に必要なこととして、活動にあたる全ての者がチームとして共通認識することが重要となります。

リーダーの合図で、活動する者（メンバー）は不安定なものの排除をはじめ、救助活動中に二次災害が発生しない環境をつくりましょう。

●危険な箇所等を発見した場合は、リーダーに大声で伝える

↓

●リーダーは、その危険箇所等を、全ての活動者に大声で周知する

↓

●リーダーの指示で、危険箇所の排除や処置を行う【活動の進捗状況は適宜リーダーに報告】

↓

●リーダーは、全ての活動者に適宜、進捗状況の周知や処置が完了した場合の周知は行う

危険要因の排除

写真は一例です！

周囲が安全なのか？　上方は大丈夫か？　・・・
場合によっては、ロープによる結着をしてからでないと活動に入ってもらえないかも知れません。

危険要因の排除

危険要因の例

○　出火危険（プロパンガス等）
○　転倒・落下危険のある柱や梁（はり）
○　不安定なコンクリート片
○　むき出しの鉄筋
○　踏み抜き危険のある釘等

危険要因の例
○　出火危険（プロパンガス等）
○　転倒・落下危険のある柱や梁（はり）
○　不安定なコンクリート片
○　むき出しの鉄筋
○　踏み抜き危険のある釘等

巻き結び【結着】

　不安定なものがある場所での活動には、ロープによる固定処置が必要になることもあります。
　たくさんのロープ結索を覚えていただくことに越したことはありませんが、倒れてきそうなものを除けられないときに、安定しているものに結わえる『巻き結び』は覚えておきましょう。

基本の結び方です。
資料では書かれていませんが、巻き結びをしたあとに必ず半結びまでしてください。
※詳細は、実践の訓練でご確認ください。